

## 夜行バス

はあ〜と息を窓に向けて吐いてみる。冷たい窓が丸く曇った。僕はそこに意味もなく線をキュキュと書いてみた。外をみると真っ暗だ。街灯は均等においてあるが、その距離が遠すぎるせいで光が届かない真っ暗な場所がある。僕はその暗闇をじっと見てみる。僕は何かを探している。今のこの状況を打破してくれる何か。暗闇の中に何か見えた。看板だ。

### 『シカ注意』

シカがいるのか。それは是非とも見たいものだ。そもそもシカでどんなんだっけ。僕はサンタのソリを引っ張っている動物をイメージした。あ〜、あれがシカか。そんなのが野生でいるのか。野生の動物、という概念が無かったがやはりいるものか。しばらくシカを探したが、その姿を見つけることはできなかった。僕は窓の外を見るのをやめて、携帯電話をつけた。暗闇の中でディスプレイの明かりが眩しく僕は目を薄めた。ふと隣を見て見ると、彼女のえりは寝ていた。前の方を見てみると、出発したときに騒いでいた大学生っぽい4人も静かに寝ていた。おそらくこの空間の中で今起きているのは運転手と僕だけだろう。あ〜お尻が痛い。膝伸ばしたい。そして寝れない。

「この度は湯沢温泉スキー・スノボツアーにご参加頂きましてありがとうございます。23時には消灯しますのでよろしくお願いいたします」  
添乗員が話す。僕は彼女と夜行バスのスノボツアーに参加していた。夜行バスは慣れないが、金額的にもスノボをおこなう時間を確保するためにも仕方ないことだ。

「楽しみだね！」

「そうだね」

彼女は興奮気味に僕に話しかけてきた。僕はさらっとそうだね、と流したが心の中では興奮が収まらない。僕はスノボが大好きだ。最後にスノボをしたのは今年の2月。もう10ヶ月も我慢した。夏の間もスノボの動画を漁り、イメージトレーニングをした。僕は毎年毎年自分に目標をたてる。スノボ1年目は綺麗なフォームで滑ること、2年目は滑りながら回転などの技をする通称グラトリを取得する、3年目にはジャンプ台を利用し技を繰り返す。4年目の今年は

各技の高度化だ。イメトレは完璧。早くそれを実際に試したい気持ちでいっぱいだった。それ故に、僕の意識は彼女には向かずさらくと流してしまった。バスは新宿のバス乗り場を出発し30分ほど経っていた。車内にいる人はまだみんな起きているようだった。えりも誰かとラインをしていた。通路を挟んだ向こう側の席には女性と男性が二人で座っていた。年齢は僕たちよりも下に見えた。女性の方は髪を茶髪にし肩まで伸びた髪先はパーマでグリグリになっていた。僕はグリ子と呼ぶことにした。男性は、ニット帽を被りメガネをかけていた。僕はのび太と呼ぶことにした。

「ねえ、見てライン。たかしがなんか言ってるよ」

グリコがのび太にラインをみせる。

「なにになに？」

「来週試合あるらしいよ」

「えー相手どこだよ」

「駒沢のチームだって」

うーん、何サークルだろう。僕は推理を始めることにした。グリコは茶髪まあ、マナージャーだな。のび太は、足太いし、顔もちよつといけてる感じだし、うん、こいつらサッカーサークルだな。

「場所どこだって？」

「鹿島ハイツ」

やっぱり！鹿島ハイツはサッカー場の名前だ。僕は少し興奮した。

僕もよくそこでサッカーの試合します。どこ大学なんですか？

立教ですけど、、、

あ、なんかサッカーの話してたので、僕もサッカーサークル入ってるんですよ

あ、どこなんですか

キッカーズでとこなんですけど、知ってます？

あ、慶応ですよ。

あ、はい

そして僕はドヤ顔をしてしまう。

実際話しかけることはできないので、一通りの妄想を試してみた。僕はその妄想に満足し、グリコとのび太から興味がなくなった。

バスは高速に乗ろうとしていた。時計を見るともう23時になる。ああ、とうとう消灯の時間だ。僕が嫌な時間。何故なら、僕は夜行バスの中で中々寝付けないで一人になってしまふからだ。さっきまでうるさかった車内はどんどん静かになっていく。そして、パチっ

電気が消えた。窓から高速の明かりが入ってくる。その明かりが僕のことを暗闇の孤独から救ってくれる。

「ねえ、眩しいからカーテン閉めて」  
えりが眠そうな目を擦りながら僕に言ってきた。

これくらいの明かり眩しくないだろ

「いいよ、ごめんね」

良い彼氏を装っている僕は心の声とは異なる言葉を発していた。なるべく音を立てないようにカーテンを閉めた。僕はカーテンの内側に顔を入れて窓に頭をつけた。バスの揺れが窓を伝って僕の頭にまできた。

「ああああああああ」

声を出してみると、少し震えた。はい、寝れない理由その1。バスの揺れで頭を置くところが常に揺れているから。頭が揺れる、なんか耳が痒くなる、眠れない、この繰り返し。彼女の肩に寄りかかろうかと思いついて見たが、身長差のせいで首を痛めそうになってやめた。次に僕は席の前についてある机を利用して顔を伏せて寝てみようと思いついて、実践してみた。

おっ、ちよっと席と机の間があるけどそれほど振動もないしこれなら寝れるぞ

僕は嬉しくなった。ねれないと思っていたから携帯電話には映画を3本ほどダ

ウンロードしておいたが、良い意味で期待を裏切られた。なんだ、寝れるじゃないか！僕はアウターのポケットからイヤホンを取り出し携帯電話に繋げ、いつも聞いているプレイリストを再生した。いつも聞いているイントロが流れる。僕は目を閉じた。なんだか軽くウトウトしてきた。

ガタンっ

僕は目を開けた。

「う、寝そうになつていたのに」

僕はがっかりして体を起こした。周囲を見るとバスの揺れなどなかったようにみんな寝ていた。また孤独を感じるのか。何か、何かあればな。僕はカーテンの中に入り窓の外をみた。外は真っ暗だ。その時、なんか大きな動物みたいな生き物がいた気がした。そしてその動物にソリみたいのがつながっている。僕は目を疑った。

ん？なんかソリに乗ってる。

赤い服のおじいさんが乗っている。

え？サンタ？

僕はフツと笑ってしまった。

大学生にもなつてどうした自分。サンタ？ソリ？いるわけないでしょ。

しかし、僕は窓の外に目をこらす。冷たくなった窓に額を押し当てて、その物体の正体を探した。しかし、見えるのは木々ばかりで何も無い。家もない。何か見間違えたのかと思った。と思った時木々の間からいきなり、シカがソリを引っ張り飛び出してきた。

はい！？

僕は自分の目を疑った。サンタ？なぜ？全然クリスマスでもないのに、僕は疑問でたくさんになった。するとシカはバスと平行に走りはじめサンタが僕の真横にやってきた。

「おい、これはシカじゃなくてトナカイだから」

サンタらしきおじさんが僕に大きな声で話しかけてきた。

は？

そしてシカは木々の間に消えて言った。

「あ、サンタ引っ張ってるのシカじゃなくてトナカイか」

え？それいいにきたの？てかサンタてあんな感じなの？

「あれがトナカイかくなるほどね。」

あ、えりにも話そうっと。

「ねえ、えり・・・」

「あれがトナカイか」

「ねえ、起きて！サービスイア着いた」

なんか体が揺れている。目を開いたらえりが僕の体を揺らしていた。

「ンンン？」

「なんか寝言言ってたよ。トナカイかいて。なんの夢みてたの」

えりは笑いながら僕に話しかけてきたけど、僕は寝ぼけてたから反応できなかった。しばらくしてから状況を把握できるようになった。ああ、あれは夢だったのか。

「なんかお腹すいた。早く行こうよ」

えりが僕の服を引っ張る。

「ちよつと待ってよ」

僕は財布をカバンから取り出し、立ち上がった。バスの外に出ると冷たく痛い風が吹いて、僕はぶるつと体を震わせた。

「ねえ、さつきさんの夢みてたの？」

えりが僕の顔を覗き込んでくる。

「ああ、サンタを引いてるのってトナカイなんだよ、知ってた？」

「何それ、知ってるよ」

僕はそれだけを話し、この夢は秘密にしようと思った。